

◆ 第7回 公開メンバーズトーク 2013年12月9日(月)19:00~19:45

会場：ギャラリーアシハラ

講師：篠田 義男（篠田義男建築研究所）

テーマ：「坂倉準三 旧飯箸邸記録と保存」



- JIA 千代田地域会会員による公開メンバーズトークの第7回は、地域会代表でもある篠田義男さん。坂倉建築研究所で建築家としてのキャリアをスタートされた篠田さんは、国立近現代建築資料館で開催されている「人間のための建築—建築資料からみる坂倉準三」展によせて、坂倉準三の戦前の重要作品である旧飯箸邸の保存に関わられた話をさせていただきました。

- 坂倉準三は、1901年岐阜に生まれ、1927年東大美術史学科を卒業し、1931年よりコルビュジェのアトリエに入所、帰国後再渡仏してパリ万国博日本館を設計しグランプリを獲得し鮮烈な国際的デビューを果たします。坂倉は戦後、鎌倉の神奈川県立近代美術館をはじめ、多くの作品を世に出しますが、1942年に竣工した旧飯箸邸は、パリ万博と戦後の名作である鎌倉近代美術館の間にあつて坂倉準三の、戦前期を代表する重要な作品です。

旧飯箸邸は、2006年に解体の危機が伝えられましたが、JIA や NPO 世田谷街並み保存再生の会などの努力の後、坂倉 OB を中心にさまざまな障害を乗り越え、所有者はじめ、多くの人々の協力によって軽井澤に移築的保存をされ、レストランとして再び生命を得ました。

この問題を機に坂倉 OB を中心に結成された「旧飯箸邸記録と保存の会」が、資金調達、解体実測調査・記録の作成を行ない、設計を担当した坂倉アトリエの監理などに協力しました。この建物は木造大壁の建築であった事と、内外の壁仕上げが殆ど漆喰であった事が幸いし、移築に伴う筋交いの追加など現実の法規制と、保存再生のオーセンティシティを何とか平衡させる事に辛うじて成功しました。結果として、解体された建物の実測調査と移築のプロセスで、坂倉準三が設計細部に加えた様々な工夫や、床暖房の全面的な採用などの戦前の環境設計の水準などが、皮肉にも再発見された事にもなりました。

実測記録などは記録集にまとめられ、使用されなかった採取部材は軽井澤文化学院ルヴァン美術館などに一部保管されています。移築的保存には批判もありましたが、困難な状況の中での出来ることの限界でもあり、評価は後世に待ちたい、と語りました。

会員10名のほかに、2名の聴講者が来ていただきました。



軽井澤へ移築後の旧飯箸邸（現：ドメイヌ・ドウ・ミクニ）